

Ulrike Hauser-Suida,
Gabriele Hoppe-Beugel:

*Die Vergangenheits-
tempora in der deutschen
geschriebenen Sprache der
Gegenwart*

諏訪 功

本書はその副題 Untersuchungen an ausgewählten Texten が示すとおり、現代ドイツ語の書きことは、とくにその過去時称、すなわち過去形 (Präteritum)、現在完了形 (Perfekt)、過去完了形 (Plusquamperfekt)、および時称の一致 (Consecutio temporum) と二重の書きかえ (Doppelumschreibung) に関する実証的な研究である。資料はマンハ

イムのドイツ語研究所 (Institut für deutsche Sprache) 所蔵のものから、いわゆる純文学の作品を2篇、いわゆる中間小説を2篇、啓蒙的な自然科学論文を2篇、政治家の回想録を1篇、新聞の政治欄約半月分を選んで用い、必要な場合には、他の資料をも用いたと記されている。資料はすべて散文である。巻末にまとめられた文例と参考文献表を含めて、全体は406ページにのぼる大冊であり、数字と数表に満ち満ちている(下表を参照)。

この表についての詳述は避けるが、要するに調査された全資料のなかにあらわれる過去時称形の総計は25262であり、そのうち過去形は19955(78.99%)、現在完了形は3109(12.31%)、過去完了形は2198(8.70%)であることが読みとれる。この数字がはたして十分に大きいかどうか、すなわち一般的な結論を導きだすに足る統計上の量であるかどうかはわからないし、2人の研究者自身も、これらの資料の質的な片寄りを認め(S. 27)、さらにまた複合文における時称の一致などについては、統計的な研究方法の限界を認めている(S. 15)。しかしこれらの留保にもかかわらず、本書における歴大な数字の処理は、ドイツ語研究所という大きな組織を俟っては

TABELLE I.

Die Vergangenheitstempora in den untersuchten Werken

| | CLOWN | HOMO | MORD | HERZ | SER | NAT | ERINN | FAZ | Σ |
|---------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| Perf. | 303 | 408 | 243 | 426 | 819 | 148 | 338 | 424 | 3109 |
| | 4,77 | 8,62 | 5,10 | 49,59 | 29,60 | 37,85 | 8,35 | 31,43 | 12,31 |
| Prät. | 5428 | 4061 | 4227 | 288 | 1723 | 219 | 3234 | 775 | 19955 |
| | 85,5 | 85,84 | 88,71 | 33,53 | 62,27 | 56,01 | 79,87 | 57,45 | 78,99 |
| Plusqu. | 620 | 262 | 295 | 145 | 225 | 24 | 477 | 150 | 2198 |
| | 9,76 | 5,54 | 6,19 | 16,88 | 8,13 | 6,14 | 11,78 | 11,12 | 8,70 |
| Σ | 6351 | 4731 | 4765 | 859 | 2767 | 391 | 4049 | 1349 | 25262 |

じめて可能であったと思われるし、研究の意図、すなわち実証的な研究を通じて、時称に関するさまざまな見解、さまざまな規範の再検討を促すことは、十二分に達成されていると思われる。

時称に関して近年公にされたさまざまな見解のなかには、Leo Weisgerber がその著書 *Zweimal Sprache* (Schwann 1973) において詳述し、またその標題によって暗示した二つの立場が、とりわけ鮮明な形であらわれている。単純化して言いあらわすならば、それは主観主義対客観主義、相対主義対普遍主義の対立であり、この点に関する好個の資料は *Der Begriff Tempus—eine Ansichtssache?* と題された論文集である (Schwann 1969)。この論文集に収録されているさまざまな議論の呼び水となったものは、*Wirken des Wort* 16 (Schwann 1966) に発表され、この論文集の冒頭に再録された Hermann Gelhaus の論文 *Zum Tempussystem der deutschen Hochsprache* である。Gelhaus は、伝統的なドイツ語の時称体系をひとまず白紙に戻し、ある行為または事象が、発話時において ① 完結している、② 定結していない、③ 始まっている、④ 始まっていない、という四つの目印を設定し、これによって各時称形のあいだの時間関係をとらえなおそうと試みる。

Gelhaus のこの提案に対するもっとも強い反論は、Wolfhard Kluge によって、その論文 *Zur Diskussion um das Tempussystem* (ibid. S. 59-68) のなかで述べられている。Kluge は、時称形を一義的に時間関係の表現のために用いられると見なす考え方に、真向から異議を唱え、話者の主観の優位を主張する。たとえば同一の過去の行為または事象であっても、それを現在の立場から報告し、判断し、言及する (*besprechen*) 場合

には現在完了形を用い、過去に没入して物語る (*erzählen*) 場合には過去形を用いる。したがって時称の交替は話者の態度の交替を示すものであって、時間関係の表現ではない。„Die Tempora sind Ansichtssache“ というのが Kluge の結論である。

Kluge の否定的な反応に対し、Gelhaus の出発点を肯定しながら、それをさらに進めたものが Klaus Baumgärtner/Dieter Wunderlich の *Ansatz zu einer Semantik des deutschen Tempussystems* である (ibid. S. 28-49)。2人は第一に Gelhaus と同じく、時称形は発話時との関連における時間関係の表現であるという基本的な考えに立つ。しかし2人はこの時間関係の表現を、時称形のみならず、時の副詞、発話全体の性格などを含むさまざまな要素の徹底的な形式化によって表現し、またドイツ語という特定言語の枠を越えて、言語一般における時間論理 (*Zeitlogik*) の表現を探究しようとする普遍化への志向を示している。このかぎりでは2人は Gelhaus と一線を画していると言えよう。Gelhaus はむしろ、ドイツ語という特定言語の資料を統計的に処理してゆくための作業仮設という性格を、強く打ち出しているのである。

以上のような背景のもとにこの *Die Vergangenheitstempora in der deutschen geschriebenen Sprache der Gegenwart* を読むと、この研究が Gelhaus, Baumgärtner/Wunderlich の路線にしたがったものであることがわかる。ただしここには Gelhaus のような作業仮設はなく、また Baumgärtner/Wunderlich のような厳密な形式化は、意図的に避けられている (S. 5)。本書の全体を通じて、作業は次のような手順を踏む：まず各時称の義務的な用例を示す。この際、それと競合する他の時称形を代入して見て、そこに

生じうる意味上の変化が判断の基準になる。いわゆる代入テストによるインフォーマントの判断にしたがって、ひとつの時称形の使用が義務的であるか任意的であるかが決定されるのである。たとえば他の時称形、主として現在完了形と代替可能な任意的な過去形は、Präteritum F I と名づけられ、代替不可能な義務的な過去形は Präteritum F II と名づけられる。そして Präteritum F I と Präteritum F II とにそれぞれ共通する目印が求められるのである。

一見平凡に思われるこの作業の過程で、われわれはしかし、事実の持つ説得力にいわば圧倒されるのである。過去形と現在完了形の関係に関し、本書においてたえず言及されているのは、Harald Weinrich が *Tempus—Besprechene und erzählte Welt* (Kohlhammer 1964, 改訂版 1971) において展開している時称論であり、とりわけ言及＝現在完了形、物語＝過去形という二分法にもとづく過去時称形の交替に関する説である。この説は前出の Kluge 論文にそのまま（おそらくは Weinrich の意図以上に極端な形で）受けつがれているが、この Weinrich/Kluge の時称論が、数字によって次々とその基盤を揺るがされてゆく。たとえば 37 ページでは、物語においては過去形が主たる過去時称であるという説、すなわち時称形をテキストのタイプと結びつける Weinrich/Kluge の考え方が、数字によって覆される。この書評の冒頭に掲げた数表を見てみよう。ここからは現在完了形と過去形の使用頻度が反比例の関係にあり、相補的な分布を示していることはわかるが、作品のジャンル別の目立った偏差は認められない。ここで扱われている八つの資料のうち、七つにおいて過去形が過去をあらわす主たる時称であるが、この七つの資料は小説、啓蒙的な自然科学論文、新聞の報道

記事など、Weinrich/Kluge の二分法によれば相容れないさまざまなタイプのテキストを含むのである。Weinrich/Kluge に対する批判は、さらに 47 ページ、81 ページ、90 ページにも見出され、besprechen と erzählen という二分法では覆いにくい言語の実態が紹介される。いずれも説得力を持つ批判と言えよう。

いわゆる *verba dicendi, verba sentiendi, haben, sein, Modalverben* など、個々の動詞に関する統計、また時の副詞、接続詞との共起関係に関する統計を経て、現在完了形と過去形の関係について得られた結論は次のとおりである (S 180):

現在完了形も過去形も、ともに発話時からの時間的なへだたりを表現し、この機能 (F I) においては相互に代替可能である。しかし現在完了形は一定の次元にかかわる完結を表現し、過去形は過去のコンテクスト (Vergangenheitskontext) を告知するという固有の機能 (F II) を持つ。この機能においては、相互の代替は不可能である。

そのほか、伝統的な意味における *Consecutio temporum* がドイツ語には存在しないことを統計的に確認し、この点に関する規範文法の定義の再考を促しているところも興味深い (S 253)。

もちろん本書にもいくつかの難点はある。たとえば実践的な統計処理に伴うべき理論的な支えが、ときとして弱いという印象を受ける。発話時からのへだたりという点で代替可能であるにもかかわらず、その代替関係が実現されていない事例を扱うくんだりなど (S. 119-159)、そこに関係してくるさまざまな要因の列挙は、きわめて錯綜している。ここに形態論上の、意味論上の、あるいは統語論上のある種の秩序を設定することは不可能であろうか。また決定的な個所で用いられている

Aktionsart という概念も、より厳密な定義が必要であろう。

言語研究のうえでどのような立場をとるにせよ、われわれは生きた言語の実体から出発し、たえずそこへ立ち戻らなければならない。この実体の大がかりな記録として、本書は将来、時称を論ずる際の基礎資料のひとつになると思われる。

*Untersuchungen an ausgewählten Texten,
Hueber Schwann.*